

三省堂 高校英語教育

2009年 夏号

巻頭エッセイ

バラク・オバマ 「アフリカ系のジョージ・ワシントン」の歴史的文脈 越智道雄 1

特集

新学習指導要領

新旧学習指導要領比較

- ・ 全体構成 3
- ・ コミュニケーション英語 ~ 7
- ・ 英語表現 、 12
- ・ 場面と働き・言語材料・内容の取扱い 18
- ・ 英語会話・コミュニケーション英語基礎 22

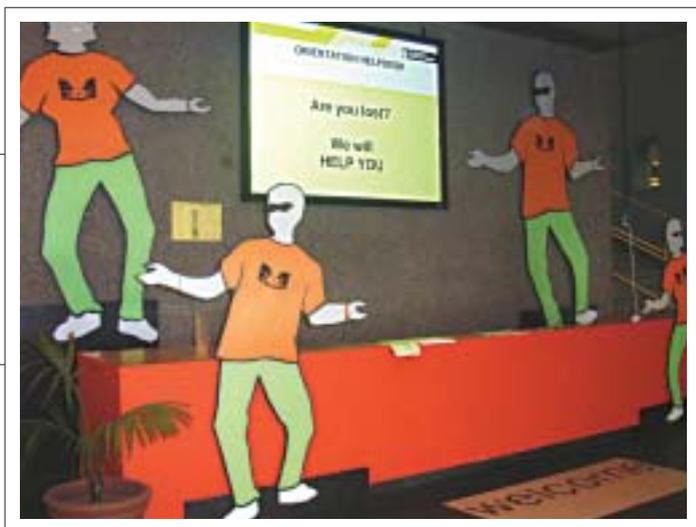
付録：新学習指導要領外国語科（抄） 24

essay: No Tipping for Great Service in Japan Todd Jay Leonard 26

センター試験の分析と対応 渡辺 聡 28

インドの今を象徴する都市 金子朝子 表紙裏

表紙写真について 田嶋美砂子 表紙裏





インドの今を象徴する都市

昭和女子大学 金子朝子

コルカタはインドの北東部にある。以前はカルカッタと呼ばれていたが、1999年に植民地以前の名前「コルカタ」に戻った。アジア初のノーベル文学賞受賞者である詩人タゴールが生まれ、マザー・テレサが作った「終末の家」のある都市でもある。約1400万の人口をかかえ、急速に近代化が進んでいる。空港から町に出たとたん、ものすごい車の数と排気ガスの臭いに圧倒される。右左、前後から車が入り混じってひしめき合う。どの車も先を争って走るので、ハラハラのし通しだ。運転手たちは、遊園地にあるマッドマウスさながら、正面から突進してくる車を見事にさっとよける。

「まな板の上の鯉」と思って諦めかけた頃よく見ると、ひしめき合っているのは、車だけではないことに気付く。庶民の生活地域にも残る古いイギリス植民地時代の建物は、骨格だけは今でも頑丈だが、その多くは内装が朽ちてしまっている。路上でその日暮らしをする人もまだ多く、貧富の差も大きい。道端に露天商が所狭しと立ち並び、「湧き出している」としか言いようのないように人々が行き交っている。

もっと驚くのは、そんな雑踏の中を牛が悠然と歩き、道路をふさいでも決して追いやったりはしないことだ。ヒンズー教では牛はシバ神の乗り物、神の使いである。道端に生えているほんのわずかな緑の草を悠々と食べていたりもする。市場に行く大きな荷物を運んだり、荷車に人を乗せたりして人々と共に生活している。土埃にまみれて、商売をしたり、座り込んだり、歩いたりして生活している人たちの中に子供達もたくさんいる。犬も、猫も、鳩も、鶏も



いる。この地域だけを見ていると、動物と人間の区別すら無いようにも思える。

日本と何が違うのか考えてみた。ここに生活する人たちには、ほんのわずかな食べ物や草でも、食べられれば根こそぎ食べる、車が通ろうと人が歩こうと、場所があればどこでも寝るといふ、「生きる」エネルギーが満ち溢れている。日本の若者からは、何が何でもやり抜くぞという活力や熱気が最近伝わってこない。安全で、清潔で、おとなしくしていれば無事に人生が終るような、そんな温室にも似た日本の環境の中で、人間が本来持っているパワーはどこで発散したら良いのだろう。

広いインドのたった一つの都市コルカタの一面を見ただけで、インドは到底語れない。より深くコルカタを知り、インドの魅力を更に探りたいものだと益々興味が湧いて来る。

表紙写真
について

「オーストラリア人」

星美学園中学高等学校 田嶋 美砂子

オーストラリアの大学の新年度は通常、2月末に始まる。その数週間前からオリエンテーションが実施され、新入生は大学生活に関するさまざまな説明を受ける。この期間のキャンパスには写真のようなヘルプデスクが設けられ、教職員のみならず、有志の在校生も多数、サポートにあたる。

新入生の中には留学生も多い。90年代半ばに「高等教育の国際化」という名の下、大学などの教育機関が留学生の受け入れを大幅に拡大したことに起因する。それから10余年、留学生側もさまざまな変貌を遂げた。最大の変化はpermanent residency visa（永住査証、通称PR）の獲得を最終目的とする学生が増加したことであろう。

PRは国民の持つcitizenship（市民権）とほぼ同等の権利が約束される。そのため、出身国と比較し、オーストラリアの方がよりよく生きられると判断した人々の間で人気が高い。しかし、その獲得には通常、この国の教育機関で2年以上、学ばなければならない。興味深いのは、オーストラリアで人材が不足している職業（例えば、医師、看護師、エンジニア、会計士など）に直結する学問を専攻すると、PR獲得に必要なポイントが高くなる点である。その他にも年齢や英語力、実務経験などがポイントを左右する。

人口が2千万人程度のオーストラリアにとって、高度な技術や専門知識を有し、この国の発展に貢献することのできる若い人材は貴重である。このような背景と留学生側の希望が合致し、今日のオーストラリアが形成されている。

PRの獲得から数年が経過すると、今度はcitizenshipを得る機会が生まれる。citizenshipの保有者は選挙権が与えられ、海外渡航の際にはオーストラリアのパスポートを使用することになる。「オーストラリア人」の誕生である。

数年前に「オーストラリア人」となった友人から話を聞いた。citizenshipの取得には管轄する省による簡単な（彼曰く、形式的な）面接があり、「あなたはよきオーストラリア人になれますか」などの質問を受けるそうだ。彼も問われ、「はい」と答えたが、その面接官が「オーストラリア人」の多くを占めるアングロ系ではなかったため、逆に尋ねたところ、彼女自身も移民であることがわかったという。

後天的に「オーストラリア人」となった移民が「あなたはよきオーストラリア人になれますか」と問う職業に就く。毎年、約10万人もの人々が新たにcitizenshipを取得しているこの国の現状を考えると、珍しいことではないのかも知れない。PRやcitizenshipにまつわる問題が皆無とは言わないが（また、先住民の存在も忘れてはならないが）、懐の深さを感じる話である。同時に、私の中には別の問いが生じる。「日本人」とは一体、誰のことであろうか、と。（表紙写真も筆者による）

バラク・オバマ——「アフリカ系のジョージ・ワシントン」の歴史的文脈

越智道雄

言うまでもなくオバマは、1950年代に始まったアフリカ系の公民権運動、1960年代のカウンターカルチャー（中流白人の意識覚醒）、1980年代の文化多元主義（multiculturalism）の成果として大統領に選ばれた。最後のものは、移民の母語と文化を尊重、ゆるやかに社会主流化（mainstreaming）させていくもので、かつての過酷な同化主義（assimilation）と対極をなす。

しかし、有色人種の大半がオバマに投票したのは当然として、白人男性は有権者総数の41%、白人女性は46%がオバマに投票しただけだった。残りの白人の大半がマケインに票を投じたのである（男性57%、女性53%）。この多くが、南部や「赤地域（共和党支持地域）」のキリスト教右派その他の差別的な白人だった。

しかも1930年代の大不況に迫る置き土産をブッシュから引き継いだオバマは、はなから抜き差しならぬ切所に立たされた。早くも側頭部に白いものが見え始めたし、演説も失言は絶対で法度、テレプロンプターの使用頻度は歴代大統領では群を抜いている。さらに暗殺への懸念から装甲車なみの乗用車が用意された。ドアの厚みはオバマの頭部より幅があり、窓ガラスは15.24センチもある。すでに暗殺未遂は4件起きているし、脅迫は無数である。

映画『遙かなる大地へ』（92）の最後で描かれるオクラホマ・ランドラッシュは、19世紀末、騎兵隊を使って先住民の土地を奪い、その土地を区画して入植希望の白人男女に提供した史実である。騎兵隊はものすごい数の入植希望者をスタートラインに立たせ、大砲をぶっ放して目当ての区画へと競争させた。凹凸のひどい地面で馬車や馬は転倒、死傷者相次ぎ、区画の奪い合いで死者も出た。有色人種は、先住民も含めて、このラッシュへの参加を拒否された。

ランドラッシュは、アメリカン・デモクラシーの縮図で、スタートラインが「平等」、ラッシュが「自由競争」である。後の公民権運動は、有色人種がスタートラインに立たせると「機会均等」を要求する運動だった。オバマの大統領当選は、この運動の完遂を象徴している。他方、「自由競争」は、「結果の不平等」である。「平等+自由競争=民主主義」——この矛盾に満ちた等式の変数を平等へとずらしたのが社会主義、そしてローズヴェルト（FDR）政権が1930年代の不況対策で断行したニューディール政策だった。不況の原因は、自由競争に変数をかけすぎ、政府が独占企業に味方した結果、資本主義が停滞したためだった。FDRはそれを是正、平等へと変数を切り換えた。それを1980年に元通り自由競争へと激しく引き戻したのが、レーガン政権だった。



Aude Guernucci-Pool/Getty Images

レーガンを助けたのが、計画経済によって自由競争を過重な平等で押さえ込んだ中ソなど社会主義政権の低迷だった。低迷の原因は計画経済が個人の自由競争を禁じた点にあった。レーガンは、ランドラッシュのような激的な欲望解放によってしか経済の低迷防止は不可能と見切ったのである。今回の大不況は、デリヴァティブによって経済規模を天文学的に高めた経済的ラッシュ（暴走）が原因だった。オバマは、FDR同様、平等の変数値を上げるしかない。

しかし、オバマ個人もまた、アフリカ系としてラッシュの頂点を極めた。そこでアフーマティヴ・アクション（人種・性別による進学・雇用・昇格・ビジネス契約面での優遇措置）で、「人種・性別」の変数値を下げ、底辺に取り残された人々を人種と性別抜きで優遇する新たなアフーマティヴ・アクションを唱えている。つ

まり、オバマに投票しなかった白人ブルーカラー男性などを優遇対象にするのだ。

自分を拒否した勢力を窮地から救済する利他的な任務が、史上最初の有色人種大統領、しかも先祖が奴隷体験を持たないケニア黒人の父と差別的な南部白人の子孫ながら開明的だった母との間に生まれた混血大統領、に課せられた——この皮肉こそオバマが担う歴史的意味合いである。FDRその他、WASP大統領たちは、自分に投票した勢力を窮地から救い出した。むろん、オバマは窮地に陥った自由主義経済も、銀行や基幹産業に国費を投入して救出しなければならない。これほどの十字架を背負わされたがゆえに、オバマは「アフリカ系のジョージ・ワシントン」となる宿命を生き抜いた。そして、前述の白人たち（男性41%、女性46%）もまた、彼に自分たちの運命を託したのである。

おち みちお

明治大学名誉教授。日本翻訳家協会評議員。英語圏新世界諸国の比較文化研究がライフワーク。『オーストラリアを知るための48章』（明石書店）、『ワスプ』『日米外交の人間史』（ともに中公新書）、『アメリカ「60年代」への旅』（朝日新聞出版）、『カリフォルニアの黄金——ゴールドラッシュ物語』（朝日選書）、『ブッシュ家とケネディ家』（朝日新聞出版）、『なぜアメリカ大統領は戦争をしたがるのか？』（アスキー新書）、『アメリカン・エスタブリッシュメント』『誰がオバマを大統領に選んだのか』（NTT出版）、『オバマ・ショック』（共著、集英社新書）ほか、著書訳書多数。

教授のおいしい英会話

— アメリカ編 —

霜崎實／ジョージ・ドウ [共著]

1,890円（税込） 四六変型判 192ページ

NHKラジオ講座「英会話入門」の3ヶ月間のコースを速習2週間!で学べるようにコンパクトにまとめた英会話独習書。付属のCDを使った反復練習で、英語表現のコツと英語のリズムを体得。音声CD2枚付き。



特 集
special

新学習指導要領

——新旧学習指導要領比較——

去る3月9日、2013年（平成25年）4月から施行される高等学校の新学習指導要領が告示された。この学習指導要領は、教育基本法や学校教育法の改正などにもなって、従来にない大きな変化が含まれているものだが、こと外国語科（英語科）では、科目構成の大幅な変更があり、近年に類を見ない大規模な改訂となっている。

本稿執筆時点（2009年3月）では、文部科学省からの『学習指導要領解説』が刊行されていないので、詳細については不明である。しかしながら、現行学習指導要領（以下「旧学習指導要領」）と、新学習指導要領を対比することで、また新学習指導要領の各項目を比較してみると、ある程度のところまではその意図するところなどが推測できる。以下、新旧の学習指導要領を比較してみたい。

（三省堂英語教科書編集部）





I. 全体構成

去る3月9日に新しい高等学校学習指導要領が告示となった。2013年（平成25年）4月からの実施となる。そして、その中の「外国語科（実質的には英語科）」の構成と内容は、現行のものと大きく異なることとなった。1995年（平成6年）にそれまでのⅡ a、Ⅱ b、Ⅱ cといった科目（厳密には種目）が「オーラル・コミュニケーションA、B、C」や「リーディング」「ライティング」といった科目に再編されたとき以来の大改訂かもしれない。

新しい科目については、次項以降で詳述するが、ここではおおまかに英語科（正確には外国語科）の改訂の特徴を見ておく。

1. 改訂のポイント

新学習指導要領における主な改訂のポイントは、以下の通りである。

- 必履修科目：現行の選択必履修から「コミュニケーション英語Ⅰ」の共通必履修に変更
- 科目構成：科目構成を変更し、4技能の統合的かつ総合的な育成を図るコミュニケーション科目、論理的に表現する能力の向上を図る表現科目、会話する能力の向上を図る「英語会話」に再編
- 主な改善事項

指導する語数を充実。コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ及びⅢを履修する場合には、高等学校で1,800語、中高校で3,000語を指導

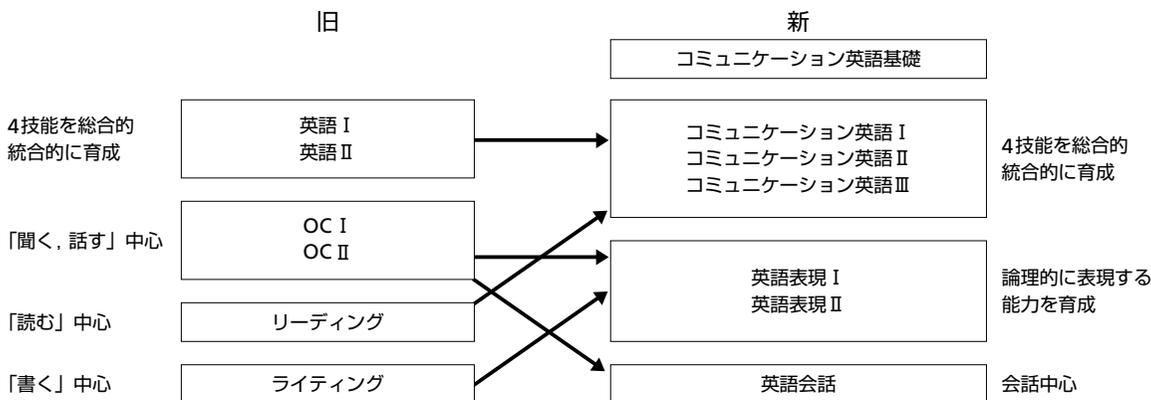
（現行、英語Ⅰ、英語Ⅱ及びリーディングを履修した場合、高校で1,300語、中高校で2,200語）

生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることを明記

（文部科学省ウェブサイトより）

2. 科目構成の変更

文部科学省によれば、新旧学習指導要領の科目構成は、下図のように変わるとされている。



なお、矢印は、指導内容の変更に係る概略イメージ（文部科学省ウェブサイトより）

3. 新科目の導入

新しい科目構成でまず目を引くのは、「英語表現Ⅰ、Ⅱ」の新設である。今までは「話すこと」（オーラル）と「書くこと」（ライティング）という重点ごとに2つの科目に分けられていたものが、「表現」の名の下に統合されたものである。

もうひとつの大きな変更が、「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」の新設である。従来の英語Ⅰ、Ⅱと同様に4技能を扱うとされているが、このように3学年を通した科目が設定されるのは、3年間かけて履修する「英語A」「英語B」が設定されていた1973年施行の学習指導要領（1983年に終息）以来のことで、ほぼ四半世紀ぶりとなる。

この他、中学校の復習のみを目的とした「コミュニケーション英語基礎」、海外生活を想定した実用的な会話を扱う「英語会話」が新設された。特に前者は、既習の内容を繰り返し学習することを可能とした新しい学習指導要領ならではの科目となっている。

4. 想定履修パターン

「総則」によれば、卒業までに履修すべき単位は74単位以上とされ、従来と同じである。他の教科の科目編成が大幅に変わらないことを考えれば、英語科でとれる単位数も従来とほぼ変わらないと考えられ、その範囲内での履修となる。現時点で想定される履修のパターンとしては、次のようなものが考えられる。なお、必修は「コミュニケーション英語Ⅰ」の3単位（2単位まで減可）のみとなっている。

現時点で想定される履修パターン

(1) パターンA

()内は単位数

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)	英語表現Ⅱ (2)	計6単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)	英語表現Ⅱ (2)	計6単位

計17単位

(2) パターンB

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)	英語会話 (2)	計6単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)		計4単位

計15単位

(3) パターンC

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)	英語表現Ⅰ (2)	計5単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (4)		計4単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅲ (4)		計4単位

計13単位

(4) パターンD

1年次	コミュニケーション英語Ⅰ (3)		計3単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)	(英語会話 (2))	計2 (4) 単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)		計2単位

計7 (9) 単位

(5) パターンE

1年次	コミュニケーション英語基礎 (2)	コミュニケーション英語Ⅰ (2)	計4単位
2年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)	(英語会話 (2))	計2 (4) 単位
3年次	コミュニケーション英語Ⅱ (2)		計4単位

計6 (8) 単位

(1) パターンA

「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と「英語表現Ⅰ・Ⅱ」を履修する。「英語表現Ⅱ」は、現在多くの学校で「ライティング」について行われているように、2単位ずつ2年に分けて履修されることが予想される。

(2) パターンB

パターンBの考え方としては、「英語表現Ⅱ」の難易度が高くなった場合、「英語表現」はⅠのみを1年次に履修し、2年次は「英語会話」、3年次は「コミュニケーション英語」のみにする、というものである。3年次は、「学校設定科目」で英語を履修する学校もあるかもしれない。

(3) パターンC

「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」と「英語表現Ⅰ」のみを履修する。「英語表現Ⅰ」の代わりに、「英語会話」をいずれかの学年で履修することも考えられるであろう。

(4) パターンD

「コミュニケーション英語」はⅠ、Ⅱのみ、そしてⅡを2年間かけて履修する。「英語会話」をどこかの年次で履修することもあるだろう（選択科目となるかもしれない）。

(5) パターンE

「コミュニケーション英語Ⅰ」は、「コミュニケーション英語基礎」のあとに履修することとされている。必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」を1年次で全く履修しないわけにはいかない場合、「コミュニケーション英語Ⅰ」を2単位に減じ、1年次で両方履修するのがこのパターンである。2年次、3年次では、単位数に応じて「コミュニケーション英語Ⅱ」や「英語会話」を履修することになるのではないか。

5. 英語での授業

今回の学習指導要領改訂では、中学、高校とも、学ぶべき語数が増やされたことが話題となった。上記「1. 改訂のポイント」、そしてこの項目を扱った別項を参照されたい。

授業を原則として英語で行う、という項目も話題になった。これは、「第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」の4番目に置かれた、以下の指示である。

- 4 英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

生徒の理解の程度への配慮は確かに必要で、何年生では何をどこまで英語で教えるのか、という問題に関しては、しばらく試行錯誤の時期が続くかもしれない。

Ⅱ. コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ

Ⅰ コミュニケーション英語Ⅰ

1. 文法事項をすべて扱う

「コミュニケーション英語Ⅰ」のポイントのひとつが、後の方にある第3款「英語に関する各科目に共通する内容等」の2にある。

「コミュニケーション英語Ⅰ」においては、(中略)ウに掲げるすべての事項を適切に取り扱うものとする。

この「ウに掲げる事項」とは、いわゆる文法事項で、以下のようなものである。

ウ 文法事項

- | | | |
|-------------|------------------------------|-------------|
| (ア) 不定詞の用法 | (イ) 関係代名詞の用法 | (ウ) 関係副詞の用法 |
| (エ) 助動詞の用法 | (オ) 代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの | |
| (カ) 動詞の時制など | (キ) 仮定法 | (ク) 分詞構文 |

取り上げられた文法事項は、実態としては旧学習指導要領のものと大きくは変わっていない。ただ、旧学習指導要領では「英語Ⅰ、Ⅱ」に分けて7単位の中で学習していた文法事項を、今回は3単位の「コミュニケーション英語Ⅰ」ですべて扱うこととなった。なお、いわゆる「文型」「文構造」という呼び方がされている)に関しては、扱う項目の具体的な指定はなくなっている。

2. 言語活動

「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」を通じて、言語活動は、「聞く」「読む」「話す(話し合う)」「書く」の4つが示されている。その内容は、旧学習指導要領と大きく異なるわけではないが、今回は言語活動の項で旧学習指導要領の「リーディング」「ライティング」や「オーラル」の記述が援用されたような、より細かい指定がされているのが特徴である。

「聞くこと」の活動は、次のように指定されている。(下線は編集部による。以下同。)

- ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

これは、旧学習指導要領の「英語Ⅰ」では以下のようにになっていた。

- ア 英語を聞いて、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。(旧「英語Ⅰ」)

旧学習指導要領では、「英語を聞いて」とされていたのが、「事物に関する紹介や対話」と聞く内容が限定された。なお、「概要や要点」を「聞き取る」活動は、以下のように旧「オーラルⅡ」にも類似したものがあつた。

- ア スピーチなどまとまりのある話の概要や要点を聞き取り、それについて自分の考えなどをまとめる。(旧「オーラルⅡ」)

ここでも、旧指導要領では「スピーチなど」といった形式の指定になっている。一方、新学習指導要領は聞く内容を指定している。

「読むこと」は、以下ようになった。

イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。

旧学習指導要領では、以下のようになっていた。

イ 英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。(旧「英語Ⅰ」)
ア まとまりのある文章を読んで、必要な情報を得たり、概要や要点をまとめたりする。(旧「リーディング」)

ここでも単に「英語を読んで」となっていたものが、「説明や物語などを読んで」と読むものが指定された。さらに「音読」が加わったが、これは旧学習指導要領では「リーディング」で指定されていたものであった。旧「リーディング」での類似する項目は、以下の通りである。

エ 文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する。(旧「リーディング」)

「コミュニケーション英語Ⅱ」では、この「読んで要点や概要をとらえる」という活動はなくなる。

3. 「話すこと」「書くこと」

発信系の言語活動の指定は以下の通り。「話すこと」は、旧学習指導要領同様「話し合う」ことが求められている。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

旧学習指導要領の類似の文言は以下の通りである。

ウ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。(旧「英語Ⅰ」)
ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。(旧「オーラルⅠ」)
ウ 幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。(旧「オーラルⅡ」)

文言としては旧「英語Ⅰ」に似ているが、意見交換の題材が、「(その場で)聞いたり読んだりしたこと」に加えて、「(過去に)学んだことや経験したこと」も含まれるようになった。

「書くこと」は、以下の通り。

エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。

旧学習指導要領では、旧「ライティング」などに、似た記述があった。

ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。(旧「ライティング」)
イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。(旧「ライティング」)
エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。(旧「英語Ⅰ」)

ここでも、新学習指導要領では「学んだことや経験したこと」という記述が増えている。また、「概要や要点を書く」という書く内容の指定はここにはない。

4. 新項目の加わった「配慮事項」

新旧学習指導要領とも、言語活動の指定のあと、それらを効果的に行うために配慮すべき事項が示されている。ここでは、音声に関するものは以下のようにになっている。

ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。

旧学習指導要領では、次のような記述になっていた。

(ア) リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。(旧「英語Ⅰ」「オーラルⅠ」)

(イ) 意向や気持ちを的確に伝えるために、リズム、イントネーション、声の大きさ、スピードなどに注意しながら発音すること。(旧「オーラルⅡ」)

旧「英語Ⅰ」と、旧「オーラルⅡ」の要素が盛りこまれていることがわかる。次は、「読む」「書く」関連の項目である。

イ 内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること。

旧学習指導要領での類似項目は、以下の通り。

(イ) 文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読むこと。(旧「リーディング」)

(ウ) 文章の構成や展開に留意しながら書くこと。(旧「ライティング」)

旧学習指導要領の「ポイントとなる語句や文」「段落の構成や展開」といった抽象的な文言から、「要点を示す語句や文」「つながりを示す語句」と注意すべきもの内容が具体的に指定されることになった。なお、これらの項目は旧学習指導要領では「リーディング」で指定されていたが、今回は「コミュニケーション英語Ⅰ」に入った。

次は新項目である。

ウ 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。

「事実」か「意見」かを区別するのは大事なことであり、従来から指導されていた先生方もいらっしゃるかもしれないが、学習指導要領の文言としては、新しいものである。

5. 「内容の取扱い」はほぼ変わらず

「3 内容の取扱い」は、以下のようになっている。

(1) 中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、聞いたことや読んだことを踏まえた上で話したり書いたりする言語活動を適切に取り入れながら、四つの領域の言語活動を有機的に関連付けつつ総合的に指導するものとする。

(2) 生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を経験させながら、中学校や高等学校における学習内容を繰り返して指導し定着を図るよう配慮するものとする。

この項目は、旧「英語Ⅰ」「オーラルⅠ」の同様の項目と、ほとんど同じ内容を述べている。

Ⅱ コミュニケーション英語Ⅱ～Ⅲ

旧学習指導要領の「英語Ⅱ」では、その言語活動は「英語Ⅰのものを発展させる」、配慮事項は「英語Ⅰと同様の配慮をする」とされた。しかし、今回は次に「コミュニケーション英語Ⅲ」までであるためであろう、「コミュニケーション英語Ⅱ」の項には具体的な内容が示されている。以下、その「コミュニケーション英語Ⅱ」の各項目を見ていく。

1. 「聞くこと」と「読むこと」

「聞くこと」の指定は、以下の通り。

- ア 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

「コミュニケーション英語Ⅰ」と比べると、「報告」「討論」という記述が増えている。

「読むこと」の指定は、「コミュニケーション英語Ⅰ」とは大きく違う。

- イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う。

読む対象に「評論」と「随筆」が加わり、また「概要や要点をとらえる」から「目的に応じた読み方」となった。具体的には「速読」と「精読」をすすとなっている。

2. 「話すこと」と「書くこと」

「話すこと」は以下のような指定となっている。これは、旧学習指導要領の同様の規定と対照した方が、その意図が分かりやすいだろう。

- ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。(新「コミュニケーション英語Ⅱ」)
- ウ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。(旧「英語Ⅰ」)

旧「英語Ⅰ」では、「話し合ったり意見の交換をしたりする」という活動だったが、今度は「話し合うなどして結論をまとめる」となっている。この「結論をまとめる」は、旧「オーラルⅡ」にも具体的な指定はなかった。

「書くこと」の記述は以下の通り。

- エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書く。

旧学習指導要領の類似の項目には、次のようなものがあった。

- エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。(旧「英語Ⅰ」)
- イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。(旧「ライティング」)

「まとまりのある文章を書く」というのは、一定の長さを持つ英文を書くことを意味するとともに、パラグラフ内の構成、場合によってはパラグラフ相互の関係に注意を払った複数のパラグラフを持った英文であることが意図されている可能性もある。

3. 新項目の多い「配慮事項」

旧学習指導要領と新学習指導要領では、「配慮事項」の記述の中での4技能の組み合わせ方が異なっている。まず、「聞くこと」に関連する2つの項目を見てみよう。

- ア 英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら聞いたり話したりすること。
- ウ 未知の語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら聞いたり読んだりすること。

これらに類似する旧学習指導要領での記述は、以下の通りである。

- (ア) リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。(旧「英語Ⅰ」)
- (ア) 未知の語の意味を推測したり、背景となる知識を活用したりしながら読むこと。(旧「リーディング」)

「英語の音声的特徴に注意して聞く」「未知語を推測して聞く」という活動は、旧「オーラルⅠ」にも「オーラルⅡ」にも具体的な指定はなかった。また、ウの項目と「言語活動」の「目的に応じた読み方」とあわせ、「コミュニケーション英語Ⅱ」では、「読むこと」は旧「リーディング」に近い活動が求められていることがわかる。

一方、「話すこと」「書くこと」に関連するものについても、新しい内容が多い。

- イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりすること。
- エ 説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること。

言語活動の指定はシンプルだったが、ここではさまざまなことに配慮するよう指定されている。具体的には、イでは

- 論点を明確にし、また根拠を明らかに示す
- 図表など、文章以外のものも利用する

という2つの項目である。言語活動の指定は、「まとまりのある文章を書く」ということのみで文章の種類や内容については何も言及がなかったのだが、これらの配慮事項から、求められている文章は、明確な主張を裏付けとともに読み手に伝えるようなものであるということがわかる。

エの方は、強いて言えば旧「ライティング」の「言語活動」にある次の項目

- ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。(旧「リーディング」)

が比較的近いが、新学習指導要領の方がいっそう具体的な指示となっている。なお、これらの事項は「英語表現Ⅱ」に、同様の記述がある。

なお、このあとに記されている「3 内容の取扱い」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」と同様であるとされている。

4. コミュニケーション英語Ⅲ

旧「英語Ⅱ」と同様、「コミュニケーション英語Ⅲ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅱ」を発展させる、という指示があるのみとなっている。

Ⅲ. 英語表現Ⅰ、Ⅱ



この2つの科目（正式には種目）の新設は、今回の学習指導要領改訂での最も大きなポイントのひとつである。「英語表現Ⅰ」は2単位、「英語表現Ⅱ」は4単位の配当で、「英語表現Ⅱ」は複数年度での履修も多いと予想される。

① 英語表現Ⅰ

1. 「目標」

ここでは、まず新学習指導要領の「1 目標」を見てみよう。

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。

旧学習指導要領で類似した内容を探してみると、以下の2つがある。

幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。(旧「オーラルⅡ」)

情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。(旧「ライティング」)

新学習指導要領にある「事実や意見などを多様な観点から考察」「論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える」といった記述は、旧学習指導要領には見あたらない。新学習指導要領では、「コミュニケーション英語」に多少類似した記述があるが、しかし前者はここが初出だ。(「事実」と「意見」について扱った項目は、「コミュニケーション英語Ⅰ」にもあったが。)
「英語表現Ⅱ」の目標は、上記の「養う」の部分が「伸ばす」と変わっているだけで、上記の目標が「英語表現」全体のものであることがわかる。

2. シンプルな指定の言語活動

言語活動の目的は、以下のように記述されている。

- (1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

これは、旧学習指導要領の「英語Ⅰ」などの科目と大きな違いはない。

- (1) 生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。(旧(英語Ⅰ))

次は、具体的な言語活動である。旧学習指導要領のものと、1項目ずつ比較してみよう。まず「話すこと」について。

ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。

この「即興で」というのが、従来にない新しい表現である。なお、旧学習指導要領での似たような記述としては、旧「オーラルⅠ」に以下のような指定があった。

- ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。
- イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。
- ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。(以上旧「オーラルⅠ」)

「書くこと」についても、シンプルな記述となった。

- イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く。

旧学習指導要領では、「書くこと」は以下になっていた。

- エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。(旧「英語Ⅰ」)
 - ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。
 - イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。
 - ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。(以上旧「ライティング」)
- (2) 言語材料の学習だけにとどめず、情報や考えを伝えるために書くなど、書く目的を重視して指導するものとする。その際、より豊かな内容やより適切な形式で書けるように、書く過程も重視するよう配慮するものとする。(旧「ライティング」の「内容の取扱い」)

「コミュニケーション英語」では、「言語活動」の項で活動内容がかなり具体的に指定されていたのだが、「英語表現Ⅰ」では「言語活動」の項目はだいぶ簡潔になった。しかし、「目標」の項目にどのように英語で発信するかということが具体的に示され、また第3款の「場面と働き」の指定の中に、「書くこと」が想定された項目が例示されているので、どんな内容を書くことが求められるか、ある程度の予想は不可能ではないだろう。

「話すこと」「書くこと」は比較的シンプルな指定だったが、次の項目はかなり盛りだくさんである。

- ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。

これは、旧「オーラルⅠ」の同様の指定に近い。

- エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。(旧「オーラルⅠ」)

「コミュニケーション英語」で示されていた「学んだことや経験したこと」がここにも見られる。「発表されたものを理解する」という内容は新学習指導要領では削除された。

3. 「配慮事項」

「言語活動」の指定がシンプルだったのに対し、「配慮事項」の方は量が多い。最初は音声に関するものである。

- ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話すこと。

これは、旧学習指導要領の「英語Ⅰ」「オーラルⅠ」に同様の項目がある。

(ア) リズムやイントネーションなど英語の音声的な特徴に注意しながら、発音すること。(旧「英語Ⅰ」「オーラルⅠ」)

次は、「書くこと」に対する配慮事項である。こちらは、「コミュニケーション英語Ⅰ」のものと類似している。

イ 内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら書くこと。また、書いた内容を読み返すこと。

旧学習指導要領でこれに対応する項目は、次のようなものであろう。

(ウ) 文章の構成や展開に留意しながら書くこと。(旧「ライティング」)

ここでは、「コミュニケーション英語」と同様、指定が具体的になっている。つまり、ただ「構成や展開」に注意するというのではなく、「要点」や「つながり」を示す語句に注意する、となった。また、この部分では、「読み返す」という活動が指定されている。

次の項目は、「発表」に関するものである。

ウ 発表の仕方や発表のために必要な表現などを学習し、実際に活用すること。

これは、旧学習指導要領の「オーラルⅡ」と共通する内容である。

(ウ) 発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現を活用すること。(旧「オーラルⅡ」)

このように、「英語表現Ⅰ」には、旧「オーラルⅡ」の要素が入っている箇所もあることがわかる。次の項目も、新しいものである。

エ 聞いたり読んだりした内容について、そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり、自分の考えをまとめたりすること。

これは「配慮事項」というよりも、「言語活動」の指定に近い。以下は、旧学習指導要領での似たような内容の記述であるが、これらはすべて「配慮事項」ではなく「言語活動」の項で示されていた。

イ 英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

ウ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。(以上旧「英語Ⅰ」)

ただし、「他の意見と比較して共通点や相違点を整理」といった表現は、旧学習指導要領には見あたらない。

4. 他の科目とほぼ同じ「内容の取扱い」

「内容の取扱い」は以下のようなもので、他の1年次用科目とほとんど変わらない。

- (1) 中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを伝える能力の向上を図るよう指導するものとする。
- (2) 聞くこと及び読むことも有機的に関連付けた活動を行うことにより、話すこと及び書くことへの指導の効果を高めるよう工夫するものとする。
- (3) 生徒の実態に応じて、多様な場面における言語活動を経験させながら、中学校や高等学校における学習内容を繰り返して指導し定着を図るよう配慮するものとする。

II 英語表現Ⅱ

1. 旧「オーラルⅡ」の流れを汲む新科目

「英語表現Ⅱ」は、「英語表現Ⅰ」が単に発展したものではない。旧「オーラルⅠ」と「オーラルⅡ」の関係がそうだったように、「英語表現Ⅱ」には、「英語表現Ⅰ」にはなかった多くの活動が加えられた。「目標」は、既に述べた通り「英語表現Ⅰ」と大きく変わらないが、指定された言語活動は、実質的には質量ともに増加している。

2. 「話す」「書く」

「2 内容」に示された「言語活動」の1（総則的な規定）は、「英語表現Ⅰ」と同じである。ただし、そのあとの具体的な指定の項目数はア～エの4つでⅠよりひとつ多く、また以下に見るようにひとつひとつの項目に複数の言語活動が指定されているため、分量がかなり多くなっている。

ア 与えられた条件に合わせて、即興で話す。また、伝えたい内容を整理して論理的に話す。

前半は、「英語表現Ⅰ」では「与えられた話題について、即興で話す」であった。「与えられた条件」に具体的にどんなものを指すのかは、本項執筆時点では推測しかねる。後半の文は新しい内容であるとも、前半の補足であるとも読めるが、おそらく「即興で話すこと」「論理的に話すこと」の2つが指定されていると見るべきであろう。

「書く活動」の指定は次の通りである。

イ 主題を決め、様々な種類の文章を書く。

主題はどのように決めるのか、「様々な種類」とは何を指すのか、ということは現時点では明確ではない。ただ、「コミュニケーション英語Ⅱ」同様、どのような文章を書くことが求められているかは、「配慮事項」の項目からある程度推測することは不可能ではない。

3. 「話し合う」活動

ここでは、旧「オーラルⅡ」で指定されていた活動が「英語表現Ⅱ」に引き継がれた。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりする。

これも、事実上2つ（またはそれ以上）の言語活動が指定されている項目である。前半では、おそらく原稿などを用意した「スピーチ」を、後半はそれに対する質疑応答や「ディスカッション」などを想定している、と思われる。旧学習指導要領では、「発表」については次のような記述があった。

エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。(旧「オーラルⅠ」)

ア スピーチなどまとまりのある話しの概要や要点を聞き取り、それについて自分の考えなどをまとめる。(旧「オーラルⅡ」)

イ 幅広い話題について情報や考えを整理し、効果的に発表する。(旧「オーラルⅡ」)

「英語表現Ⅱ」のウの項目は、旧「オーラルⅡ」の言語活動ア、イを統合したものに近い。「学んだことや経験したこと」という文言の追加は、「コミュニケーション英語」などと同様である。

なお、新学習指導要領の「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」にも、「話し合うこと」についての項目がある。さらに、話し合うことの目的として、「コミュニケーション英語Ⅰ」では単なる「意見交換」

が求められているのだが、同Ⅱ、Ⅲでは「話し合って結論をまとめる」ことが要求されていた。

次の活動も、話し合うことに関するものである。

エ 多様な考え方ができる話題について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合う。

この、「立場を決めて意見をまとめ」というのは、おそらく、複数メンバーからなるチーム対抗のディベートを想定しているのではないだろうか。なお、旧学習指導要領では、ディベートは次のような文言で示されていた。

ウ 幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。(旧「オーラルⅡ」)

旧学習指導要領の『解説』では、このうち「話し合う」がディスカッション（この言葉が使われているわけではないが）、「討論する」が「論題を設定し、自分の意見に関係なく賛成と反対の立場に分かれて相手を論理的に説得することを試みる」といういわゆるディベート（こちらはこの言葉が使われているわけではないが）を意図している、とされた。

4. 「話すこと」「書くこと」

「英語表現Ⅰ」と同様、Ⅱでも「配慮事項」に多くの内容が盛りこまれている。

ア 英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら話すこと。

これは、旧「オーラルⅡ」に類似の記述がある。

(イ) 意向や気持ちを的確に伝えるために、リズム、イントネーション、声の大きさ、スピードなどに注意しながら発音すること。(旧「オーラルⅡ」)

次に、「書く」言語活動に対する配慮事項は、以下のようになっている。

イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書くこと。また、書いた内容を読み返して推敲すること。

「書くこと」の言語活動の指定はシンプルだったが、「英語表現Ⅰ」同様、ここでもさまざまなことに配慮するよう指定されている。具体的には、

論点を明確にし、また根拠を明らかに示す

文章の構成や、表現を工夫する

図表など、文章以外のものも利用する

書いた内容を読み返す

といった4つということになる。このうち、最初の3点は「コミュニケーション英語Ⅱ」と共通であるし、「読み返す」ことについては、「英語表現Ⅰ」の項で触れた。さて、言語活動の項目では、「様々な種類の文章を書く」ということのみが指定され、文章の種類については何も言及がなかったが、これらの配慮事項から考えれば、求められている文章は、「コミュニケーション英語Ⅱ」同様、明確な主張を裏付けとともに読み手に伝えるようなものであろう。

旧学習指導要領では、「書くこと」については次のような記述があった。

ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。

(旧「ライティング」、言語活動)

(2) 言語材料の学習だけにとどめず、情報や考えを伝えるために書くなど、書く目的を重視して指導するものとする。その際、より豊かな内容やより適切な形式で書けるように、書く過程も重視

するよう配慮するものとする。(同,「内容の取扱い」)

参考までに、新学習指導要領国語科の「国語表現」にも、以下のような言語活動の指定がある。

オ 話題や題材などについて調べてまとめたことや考えたことを伝えるための資料を、図表や画像なども用いて編集すること。

5. 「話し合うこと」

討論に関連する「配慮事項」も、具体的で量が多い。

ウ 発表の仕方や討論のルール、それらの活動に必要な表現などを学習し、実際に活用すること。

「討論や発表のルール」と「それらに必要な表現」の2つが指示されている。旧学習指導要領では、これらは別々の項目であった。

(ウ) 発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現を活用すること。(旧「オーラルⅡ」)

(エ) 話し合い、討論などの基本的なルールや発表の仕方を学習し、それらを活用すること。(同)

スピーチやディスカッション、ディベートには、そのための特有の表現がある。また、円滑な議事進行のためのルールやマナーも存在する。いずれもディベートなどを実行するためには不可欠なものであるため、ここで指定されたのであろう。

エ 相手の立場や考えを尊重し、互いの発言を検討して自分の考えを広げるとともに、課題の解決に向けて考えを生かし合うこと。

旧学習指導要領には、同様の項目はない。なお、このような討論の「ルール」は日本語で行うときにも同じようにあてはまるもので、新学習指導要領でも、たとえば「国語表現」に、以下のような指定がある。

イ 相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。

また、中学校国語の学習指導要領にも、以下のような指定がある。

オ 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること。(2年)

ア 社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をする。(3年)

エ 話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと。(3年)

IV. 場面と働き・言語材料・内容の取扱い

新学習指導要領では、今までに見てきた「コミュニケーション英語」「英語表現」の他に「コミュニケーション英語基礎」「英語会話」という科目があるのだが、ここでは先に、「第3款 英語に関する各科目に共通する内容等」に記された「場面と働き」と言語材料、そして全体に対する注意事項である「第4款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」を見ていきたい。

1. 「場面と働き」の指定

「場面とは働き」は、旧学習指導要領で初めて登場したものである。これらの概念は、それまでは取り上げられたことはなく、学習指導要領では長年言語材料つまり語彙や文型文法のみが指定されてきたのだった。旧学習指導要領は英語教育の目的を「実践的コミュニケーション能力の育成」に据え、文型・文法に並ぶ新しい基準として、取り上げるべき言語の使用場面と「働き」を目安として定めた。そして、新学習指導要領でも、この「場面と働き」が掲げられたのである。

2. 旧学習指導要領での「場面」

「場面と働き」のうち「働き」の方は、いわゆる言語の「機能 (function)」に近いものであり、これは従来からよく知られた概念であった。一方、「場面」の方は、よく用いられる「トピック」による分類というより、言語が実際に使われている場所などを指していた。旧学習指導要領で示されていた「言語の使用場面の例」は以下の通り。

(ア) 個人的なコミュニケーションの場面：

電話、旅行、買い物、パーティー、家庭、学校、レストラン、病院、インタビュー、手紙、電子メールなど

(イ) グループにおけるコミュニケーションの場面：

レシテーション、スピーチ、プレゼンテーション、ロール・プレイ、ディスカッション、ディベートなど

(ウ) 多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面：

本、新聞、雑誌、広告、ポスター、ラジオ、テレビ、映画、情報通信ネットワークなど

(エ) 創作的なコミュニケーションの場面：

朗読、スキット、劇、校内放送の番組、ビデオ、作文など

3. 「場面」の指定

新学習指導要領では、以下のようになった。

a 特有の表現がよく使われる場面

買物；旅行；食事；電話での応答；手紙や電子メールのやりとり；など

b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面

家庭での生活；学校での学習や活動；地域での活動；職場での活動；など

c 多様な手段を通じて情報などを得る場面

本，新聞，雑誌などを読むこと；テレビや映画などを観ること；情報通信ネットワークを活用し情報を得ること；など

新学習指導要領では、「グループにおける」「創作的」というカテゴリーがなくなった。そして全体は、言語が使われる「場所」と、その「手段やメディア」の指定になっている。

4. 「働き」の指定

「はたらき」の方は、新学習指導要領では

- a コミュニケーションを円滑にする
- b 気持ちを伝える
- c 情報を伝える
- d 考えや意図を伝える
- e 相手の行動を促す

の5つのジャンルからなっており、ジャンル自体はaの呼び方と性格が若干変わった以外は旧学習指導要領とほぼ同一のようだ。ここでは、それぞれのジャンルごとに、新旧の異同のみを示しておく。全体的に数が減っている。

a コミュニケーションを円滑にする

新しく加わったもの：聞き直す，繰り返す，言い換える，話題を発展させる，話題を変える
なくなったもの：呼び掛ける，あいさつする，紹介する

b 気持ちを伝える

新しく加わったもの：望む，心配する
なくなったもの：歓迎する，祝う，満足する，喜ぶ，同情する，苦情を言う，非難する，後悔する，落胆する，嘆く，怒る

c 情報を伝える

新しく加わったもの：要約する，訂正する
なくなったもの：なし

d 考えや意図を伝える

新しく加わったもの：なし
なくなったもの：約束する，説得する，承諾する，拒否する，結論付ける，

e 相手の行動を促す

新しく加わったもの：注意を引く
なくなったもの：質問する，招待する，示唆する，禁止する，

5. 「新語数」の指定

「Ⅰ. はじめに」でもふれたが、今回の学習指導要領改訂では、学習すべき語数の増加が話題となった。まず、旧学習指導要領では、以下のようにになっていた。

中学校（900）＋英語Ⅰ（400）＋英語Ⅱ（500）＋リーディング（900）：計2,700語

「リーディング」は「英語Ⅰ」の次に履修することを想定しているため、「英語Ⅱ」と「リーディング」

には、場合によっては新語の重複があり得た。そのため、新出語の数は2,200～2,700語となる。

一方、新学習指導要領では以下のような指定となった。

中学校（1,200）＋コミュニケーション英語Ⅰ（400）＋コミュニケーション英語Ⅱ（700）＋コミュニケーション英語Ⅲ（700）：計3,000語

こちらは、同一書名の教科書であれば、「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」で新語の重複の可能性はない。

なお、「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」以外の科目では、その性格上、学習すべき語数は指定されていない。

6. 文型・文法項目

中学校の新学習指導要領では、文型（学習指導要領では「文構造」と呼ばれる）と文法の主な変更点は以下の2つである。旧学習指導要領では、関係代名詞の制限用法では「基本的なもの」が、「理解の範囲で」つまり読んで（聞いて）意味が分かればよいというレベルで指導されることになっていたが、その「基本的」と「理解の範囲」という制限が消えた。また、受動態は現在と過去の時制のもののみ扱うことになっていたが、その制限がなくなった。

高等学校での文型（文構造）だが、旧学習指導要領では5つのグループに分けて数多くの文型が指定されていたが、新学習指導要領では「文構造のうち、運用度の高いもの」を扱うとされ、例示がなくなった。

文法項目は、

- （ア）不定詞の用法
- （イ）関係代名詞の用法
- （ウ）関係副詞の用法
- （エ）助動詞の用法
- （オ）代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの
- （カ）動詞の時制など
- （キ）仮定法
- （ク）分詞構文

という8項目が指定されている。そして、この8項目を「コミュニケーション英語Ⅰ」ですべて扱うことが求められている。旧学習指導要領との違いは、（エ）が新しく付け加わったこと、旧学習指導要領では動詞の時制として現在完了進行形、過去完了形、過去完了進行形、未来進行形及び未来完了形の5つが列挙されていたのが（カ）のようになったこと、（キ）（ク）は基本的なもののみを指導することとなっていたのが、その制限がはずれたこと、旧学習指導要領では助動詞を伴う受動態が指定されていたのが、おそらくは中学校の変化を受けて、削除されたこと、などである。

7. 「内容の取扱い」

この「第3款」には、その他に全体を通しての「内容の取扱い」が示されている。既に述べた「原則として英語で授業を行う」という項目が目出されているが、文法に対する姿勢も変化している。旧学習指導要領では「言語材料の分析や説明は必要最小限にとどめる」とされ、コミュニケーション活動を実践することが優先されていた。しかし、新学習指導要領では、「語句や文構造、文法事項」などは用語や用法の区別などの指導が中心とならないように、との注意も添えられたうえで（これは中学校でも付け加えられていた）、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動

と効果的に関連付けて指導すること」とされた。

それ以外の項目には、比較的变化は少ない。旧学習指導要領では「オーラル I」のみで指示されていた「様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮すること」という指定が、英語科全体への指定となった程度である。従来通りの「現代の標準的な英語」による、という記述もある。

8. 題材の指定

続く「第4款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」には、英語の科目全体に対する配慮事項が記されている。この第4款の記述には、旧学習指導要領とは実質的には大きな違いはない。

題材に関する指定を見てみる。新学習指導要領では、題材は「その外国語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学」から適宜選択する、とされている。この中で「伝統文化」「自然科学」の2つは、旧学習指導要領にはなかったものである。(なお、この2つは中学校の学習指導要領でも追加されている。)

第4款にある「留意すべき事項」には、次の項目が新たに加えられた。

エ 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

A～ウは、旧学習指導要領とほぼ同一である。

- ・ 説明する
 - ・ 理由を述べる
 - ・ 考えや意見を伝える
 - ・ 申し出る
 - ・ 主張する
 - ・ 相手の行動を促す
 - ・ 依頼する
 - ・ 助言する
 - ・ 報告する
 - ・ 要約する
 - ・ 賛成する
 - ・ 推論する
 - ・ 誘う
 - ・ 命令する
 - ・ 描写する
 - ・ 訂正する など
 - ・ 反対する
 - ・ 仮定する など
 - ・ 許可する
 - ・ 注意を引く など
- 2 英語に関する各科目の2の(1)に示す言語活動を行うに当たっては、中学校学習指導要領第2章第9節第2の2の(3)及び次に示す言語材料の中から、それぞれの科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。その際、「コミュニケーション英語Ⅰ」においては、言語活動と効果的に関連付けながら、ウに掲げるすべての事項を適切に取り扱うものとする。
- (7) 語
- ア 語、連語及び慣用表現
- イ 文法事項
- ウ 文法事項
- ク 文法事項
- ケ 不定詞の用法
- コ 関係代名詞の用法
- コ 関係副詞の用法
- ク 助動詞の用法
- ケ 代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの
- コ 動詞の時制など
- ア 「コミュニケーション英語Ⅰ」にあつては、中学校で学習した語に400語程度の新語を加えた語
- イ 「コミュニケーション英語Ⅱ」にあつては、aに示す語に700語程度の新語を加えた語
- イ 「コミュニケーション英語Ⅲ」にあつては、bに示す語に700語程度の新語を加えた語
- イ 「コミュニケーション英語基礎」(英語表現Ⅰ)、「英語表現Ⅱ」及び「英語会話」にあつては、生徒の学習負担を踏まえた適切な語
- (7) 連語及び慣用表現のうち、運用度の高いもの
- イ 文法事項のうち、運用度の高いもの

V. 英語会話・コミュニケーション英語基礎

今回の学習指導要領改訂では、2単位の新科目が2つ存在する。ここでは、両者を簡単に概観しておきたい。

① 英語会話

1. もとになったのは旧「オーラルⅠ」

「英語会話」の内容は旧「オーラルⅠ」にととても近い。しかし、選択必修科目からははずれたため、その点での違いがある。

「2 内容」の項目を見てみよう。言語活動は、以下のような目的のために行う、とされている。

生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

これは、旧「オーラルⅠ」とほとんど変わらない。

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。(旧「オーラルⅠ」)

次に言語活動の指定を見てみよう。まずは最初の3つから。

ア 相手の話を聞いて理解するとともに、場面や目的に応じて適切に応答する。

イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどを場面や目的に応じて適切に伝える。

旧学習指導要領はあえて引用しないが、内容はかなり似通っている。アでは、「応答する」が旧学習指導要領では「反応する」だったし、ウにある「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき」という文言は旧学習指導要領にはなかったが、その他のア～ウは旧「オーラルⅠ」とほぼ同一である。

2. 実用性重視の「英語会話」

4番目は新項目はである。

エ 海外での生活に必要な基本的な表現を使って、会話する。

外国語科学習指導要領に、「海外での生活」といった文言が登場するのは、事実上初めてかもしれない。「外国の人々の生活やものの見方」を理解する、という内容が指定されたことはあったが、海外に

いることを前提にした会話が求められたことはなかったのではないか。

「配慮事項」は、以下の3項目である。

ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。

イ 繰り返しを求めたり、言い換えたりするときなどに必要となる表現を活用すること。

ウ ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーション手段の役割を理解し、場面や目的に応じて適切に用いること。

この3項目は、細かな文言の違いを別にすれば、旧「オーラル I」とほとんど変わらない。なお、旧「オーラル I」では、ここは4項目あったのだが、次のものが削除されている。

(イ) コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを理解し、実際に活用すること。(旧「オーラル I」)

旧「オーラル I」は、旧学習指導要領においては選択必修科目のひとつであったため、この旧「オーラル I」のみを履修して卒業することも可能だった。そのため、このような項目があったと思われる。

II コミュニケーション英語基礎

1. 中学校の総復習

以下に、全文を示す。

1 目標

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う。

2 内容

(1) 1の目標に基づき、中学校学習指導要領第2章第9節の第2の2の(1)に示す言語活動を参照しつつ、適切な言語活動を英語で行う。

(2) (1)に示す言語活動を効果的に行うために、それぞれの生徒の中学校における学習内容の定着の程度等を踏まえた上で、中学校学習指導要領第2章第9節の第2の2の(2)のAに示す事項を参照しつつ、適切に指導するよう配慮するものとする。

3 内容の取扱い

中学校における学習との接続と「コミュニケーション英語 I」における学習への円滑な移行のため、主に身近な場面における言語活動を経験させながら、中学校における基礎的な学習内容を整理して指導し定着を図るものとする。

具体的な指導内容の指示はない。言語活動も、そのための配慮事項も、中学校の学習指導要領を参照するよう述べられているのみである。目標からして4技能の基礎的な能力を「養う」とされ(「伸ばす」ではない)、ここも中学校の学習指導要領とほとんど同じ趣旨である。

(文責：三省堂編集部)

付録：新学習指導要領外国語科（抄）

誌面の都合で、一部を省略して掲載します。見出しの太字、記号字下げなどは原文通りではありません。学習指導要領の全文は、文部科学省のウェブサイトで見ることができます。ご参照下さい。

第1款 目標（略）

第2款 各科目

第1 コミュニケーション英語基礎（略）

第2 コミュニケーション英語Ⅰ

1 目標（略）

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを営もうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。

2 内容

(1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。

(2) (1) に示す言語活動を効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。

ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。

イ 内容の要点を示す語句や文、つながり示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること。

ウ 事実と意見などを区別して、理解したり伝えたりすること。

3 内容の取扱い（略）

第3 コミュニケーション英語Ⅱ

1 目標（略）

2 内容

(1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

ア 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。

エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書く。

(2) (1) に示す言語活動を効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。

ア 英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら聞いたり話したりすること。

イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりすること。

ウ 未知の語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら聞いたり読んだりすること。

エ 説明や描写の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること。

3 内容の取扱い（略）

第4 コミュニケーション英語Ⅲ（略）

第5 英語表現Ⅰ

1 目標（略）

2 内容

(1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。

イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経

験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。

- (2) (1) に示す言語活動を効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。

ア リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら話すこと。

イ 内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら書くこと。また、書いた内容を読み返すこと。

ウ 発表の仕方や発表のために必要な表現などを学習し、実際に活用すること。

エ 聞いたり読んだりした内容について、そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり、自分の考えをまとめたりすること。

3 内容の取扱い（略）

第6 英語表現Ⅱ

1 目標（略）

2 内容

- (1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。

ア 与えられた条件に合わせて、即興で話す。また、伝えたい内容を整理して論理的に話す。

イ 主題を決め、様々な種類の文章を書く。

ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりする。

エ 多様な考え方ができる話題について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合う。

- (2) (1) に示す言語活動を効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。

ア 英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら話すこと。

イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書くこと。また、書いた内容を読み返して推敲すること。

ウ 発表の仕方や討論のルール、それらの活動に必要な表現などを学習し、実際に活用すること。

エ 相手の立場や考えを尊重し、互いの発言を検討して自分の考えを広げるとともに、課題の解決に向けて考えを生かし合うこと。

3 内容の取扱い（略）

第7 英語会話（略）

第8 その他の外国語に関する科目（略）

第3款 英語に関する各科目に共通する内容等（略）

第4款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

1（略）

- 2 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 教材については、外国語を通じてコミュニケーション能力を総合的に育成するため、各科目の目標に応じ、実際の言語の使用場面や言語の動きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、その外国語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に留意する必要があること。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

エ 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

- (2) 音声指導の補助として、発音表記を用いて指導することができること。

(3) 辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること。

(4) 各科目の指導に当たっては、指導方法や指導体制を工夫し、ペア・ワーク、グループ・ワークなどを適宜取り入れたり、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワークなどを適宜指導に生かしたりすること。また、ネイティブ・スピーカーなどの協力を得て行うティーム・ティーチングなどの授業を積極的に取り入れ、生徒のコミュニケーション能力を育成するとともに、国際理解を深めるようにすること。

No Tipping for Great Service in Japan

by Todd Jay Leonard

Todd Jay Leonard has had a relationship with Japan for over thirty years. He has written twenty books and numerous academic articles in the areas of cross-cultural understanding, history, language education, religion, and spirituality. He now calls Hirosaki, Aomori home, where he lives, writes, and teaches.

As an American living in Japan, one of the best aspects I like about Japanese culture has to be “tipping”——or the lack thereof. The custom of patrons tipping service related workers in restaurants, hotels, *etc* is not normally practiced in Japan——if at all. In fact, service related workers would most likely be insulted if one tried to tip them.

An example of this was when a friend came to visit me here from back home. I took her to one of my favorite restaurants where I had become a regular. She was very impressed with our waiter who was especially attentive and friendly throughout our meal. When we prepared to leave, I got up first to pay the bill at the register. As she gathered her things, she noticed I did not leave a “tip” on the table. So to be helpful and to contribute to the meal, she laid down a ¥1,000 bill in the center of the table before leaving.

We left the restaurant and began walking hurriedly to another place where we had a scheduled appointment. Several minutes later, a very out-of-breath waiter came running after us calling my name. I had no idea why in the world he would be chasing us down because I had double-checked before we left to make sure we had all our bags and coats with us. When he reached us, he extended the ¥1,000 bill to me and said, “You forgot this on the table.” I was thoroughly confused because I knew I had not left any money on the table. Since I was speaking in Japanese, my friend had no idea why the money was being returned to me, figuring I had overpaid at the cash register.

I turned to her and said, “How strange...he found this money on our table. I wonder where it came from.” She immediately explained that she had left it as a tip, thinking I had forgotten to do so. I then relayed to our waiter that the money was left on the table by my friend, intended for him, because he was so attentive and friendly during our meal. His first reaction was one of puzzlement, which then

quickly turned to a look of bewilderment, then embarrassment. To him, it is his job to be friendly and attentive because he is serving us in the capacity as a waiter, and the restaurant pays him a salary to do so. To accept money from a customer would be unethical because it is a part of his job.

My friend tried to force the money on him, but he just bowed graciously apologizing until she took the bill out of his hand. I thanked him for going to the trouble to return the money, and explained that in the United States it is a custom to leave extra money on the table after a meal as a “tip” to the person who served the food. He admitted he had heard of the custom of tipping, but was still uncomfortable accepting cash from a “regular” customer (such as myself), and especially from a guest (such as my friend) who is a visitor to his country. He most likely felt like it was his responsibility to make sure my tourist-friend received a good impression of Japan, hence his willingness to be so attentive and friendly during our meal.

On trips home to the United States, I am always perplexed about how much a tip should be, and honestly, I am a bit resentful that I am expected to leave money over and beyond the cost of the meal for service that should be a part of the total dining experience.

I understand the economy behind tipping as a supplement to the workers' income. However, after living in Japan for so long where tipping is not a custom, I like not having to do it. If the service is indeed poor, is it all right not to leave a tip? I think most Americans feel obligated to leave a tip regardless and, in essence, view it as a part of the total cost of the meal and not solely as an award for good service.

I can think of one instance in Japan when a type of tip is given and accepted willingly. In traditional-style Japanese inns called *ryokan*, it is customary to offer money or a gift as an expression of gratitude to the hotel staff. In some Japanese inns today a service charge for this type of individual attention is added automatically to the bill; some of the older, more traditional inns do not. In these instances it is a nice gesture to offer some type of gratuity to the woman. As a high school student, I remember my host mother giving the woman who helped us at our *ryokan* an expensive box of chocolates in lieu of actual cash.

In any case, it is not expected in Japan but very much appreciated. Whereas in the United States, it is definitely expected and seemingly not very much appreciated.

Just one example of the many reason why I love living in Japan!



(弘前学院大学教授。ORBIT English Reading New Edition 著者)

センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属高等学校

Ⅰ 2009年度筆記試験の分析と対応

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験〔筆記〕でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がされた。昨年度とは出題形式に若干の変化があり、(第1問Cが3問から1問になりDが新たに加わった)マーク数は51から50になった。マーク数が減少したといっても、この量を80分でこなすためには正確かつ迅速に問題を解くリズムが必要とされる。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く難問はないが、全体として設問内容が難化したため、平均点は昨年度より約10点低くなった。例年同様、まぎらわしい選択肢がいくつかあるので細心の注意力が求められる。

- コミュニケーション能力をみる問題としては、
- 第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
 - 第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
 - 第1問C：文中である語を強調して発音する場合の話者の意図を理解する能力
 - 第1問D：文中で音声の強弱を判断する能力
 - 第2問B：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力
 - 第3問A：難しい表現でも全体の流れから意味を類推する能力
 - 第3問B：発言の内容を要約する能力
- が例年通り求められている。
- また読解力では、
- 第3問C：パラグラフ単位で文章の構成を論理的に思考する能力
 - 第4問：グラフや書類を参考にして文章を正確に読み取る能力
 - 第5問：イラスト、絵、4コマ漫画等視覚で得ら

れる情報を正確に読み取る能力

第6問：エッセイの流れを正確に追い、話者の趣旨をつかみながら長文を読み取る能力が試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上での確かな情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

全体の総語数は4,000を超えているので、正確にかつ速く読む力が要求される。

2. 具体的内容分析

<第1問>

Aは昨年度と形式、配点は変わらず。Bは同じ強勢形を選ぶ問題から第一アクセントの位置が同じ語を選ぶ問題に変わった。Cは昨年度の3問から1問になり、新たに文中で強く発音する個所を選ぶ問題のDが加わった。

A 発音 (6点：解答数3)

基本的な単語の発音を問う問題。母音だけでなく子音や黙字、アクセントの位置にも注意を払いたい。

B アクセント (4点：解答数2)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。全て3音節以上の語である。いずれも基本的な語であるが、音節をしっかりと区切り、第一アクセントの位置をしっかりとつかんでいることが最低条件となる。

C 発話の強勢の意図 (3点：解答数1)

ある語を強く発音した場合の話者の意図を理解する問題。強く発音される語と他の語との意味の軽重はなぜあるのか。対応する情報 (mathとsubject) が引き出せればそう難しくはないであろう。

D 文章の中での単語の強弱（3点；解答数1）

文章の中で音声の強弱を判断する問題。文中で強く発音される名詞、動詞、形容詞、副詞等の内容語を中心に選ばばよい。

<第2問>

形式、配点ともに昨年度と変わらず。

A 語彙、語法、文法（20点；解答数10）

単語、イディオム、動詞の語法・構文、時制、コロケーションを判断する問題。動詞の語法を問う問題（remember + -ing [問2]、spend + -ing [問4]）は頻出である。語法やコロケーションの力を併せて要求する問題（in the direction of [問3]、close down [問6]、heavy traffic [問7]）も相変わらず多い。基本的な動詞（run [問10]）、不可算名詞や同義語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B 対話文完成（12点；解答数3）

対話文を完成させる問題。発話数は昨年度と同様3～4だが、1つの台詞が長くなっている。空所の前後のせりふを参考に、会話がどのような流れになっているかを考える。全体の文脈の流れをしっかりとつかんだ上で、会話特有の表現（Why not ~? [問2]、For here or to go?、I'll put you through. [問2選択肢]）にも慣れておきたい。

C 語句整序（12点；解答数6）

状況を説明する文が昨年度よりも長くなった。各文の中に含まれる語彙・語法・熟語（have effect on [問1]、book（動詞）[問2]）を使い、意味の通る文を作る問題。語法・熟語の知識だけでなく、関係代名詞の省略（everything you eat [問1]）やif省略の条件節（had I ~ [問3]）といった文法・構文の知識も必要とされる。

<第3問>

形式、配点ともに昨年度と変わらず。Aの本文の総語数は昨年度より減少し、1問は対話文となった。Bの総語数は減少し、Cは増加した。

A 語やフレーズの意味類推（8点；解答数2）

下線部の表現や単語の意味を全体から類推する問題。対話や1パラグラフの中でどのように状況が推移しているのかを正確に読み取り、ヒントとなる語（句）をもとに想像力を働かせる。

B 発言の意図の要約（18点；解答数3）

3人の発話を要約する問題。ある具体的事例を

別の単語を使って要約している（this を quality で、lots of friendsを quantityでそれぞれ言い換え [空欄29]）ので、幅広い語彙とポイントを押さえる柔軟な読解力が必要とされる。

C 適文補充（18点；解答数3）

指定された空欄に選択肢で与えられた適切な文を入れる問題。

選択肢の文中、及び挿入箇所前後の代名詞や指示語、接続する語（句）に気をつけ、論が正しく展開するよう当てはめてゆく。「単語→文→段落→全体の構成」を捉えるためには、各文をきちんと読み取る力と大きな視野で流れを捉える力の両方が必要となる。

<第4問>

形式、配点ともに昨年度と変わらず。図表読み取り読解問題。昨年度Aにあった本文中の空所補充問題はなくなった。

A グラフ読み取り問題（18点；解答数3）

本文とグラフを参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。グラフは参考程度で、本文の読み取りが中心となる。

B 書類読み取り問題（18点；解答数3）

医療機関での問診票から適切な情報を読み取る問題。まず設問を読み、求められている情報がどこにあるのかを探し出していく。

<第5問>（18点；解答数3）

形式、配点ともに昨年度と変わらず。イラスト読み取り読解問題。総語数は昨年度より増加した。

A イラスト説明問題（6点；解答数1）**B イラスト選択問題（6点；解答数1）****C 4コマ漫画説明問題（6点；解答数1）**

それぞれの選択肢がどの点で他と違うのか、一つひとつの事項を最後まで順を追って確認していく慎重さが要求される。

<第6問>（42点；解答数7）

形式、配点ともに昨年度と変わらず。長文読解問題。本文の総語数は昨年度とほぼ同じ。

エッセイを読んで質問に答える問題。各パラグラフをトピック別に分類する問題（問6）や論全体の意図をまとめる問題（問7）は例年通り出されている。各パラグラフのポイントをつかみ、話がどのように展開し、話者はなにを言おうとしているのか、といった深い読み方ができる力

を養っておきたい。また、正解の選択肢は本文に載っていない単語（表現）で求められる場合も多いので、基本的な類義語力も必要である。

3. 昨年度と変化のあった点と新傾向

- ①総語数が若干増えた。
- ②第1問Bが同じ強勢形を選ぶ問題から第一アクセントの位置が同じ語を選ぶ問題に変わった。
- ③第1問Cが3問から1問に減り、新たにDが加わった。第1問全体の配点は変化なし。
- ④第2問Cの選択肢が5から6に増えた。また、状況を説明する文が昨年度よりも長くなった。
- ⑤第3問Aの本文の一つが対話文となった。
- ⑥第4問Aの本文中の空所がなくなった。
- ⑦発話の中での単語の強弱を問う問題（第1問D）が加わった。

4. 日頃の学習で大切なこと

①多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換など、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持たせると、未知の語に遭遇したときにも、想像力を働かせて意味がつかめるようになる。

②語と語のつながり（語法、Collocation）に関心を持つ

ある単語を頭に入れる際、その語がどのような語と一緒に使われる場合が多いのかに気を配る習慣を身に付けておきたい。

③英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をすることが大切である。能動的に音読をするためにはただ音をなぞるだけではなく、内容を理解する必要があるし、何回も繰り返して読み込んでゆけば、なによりも、英語の音に対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

④論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。パラグラフがどのように構成されているか、全体の論調を捉えてから、それを確認補足する細部（各文のポイント）を読み取りを行って読解力を養いたい。

⑤多読を心がける

80分で4,000語を越える分量の英語を読みこなすには、ふだんから500～1,000語の文章のある程度のスピードをもって読むことが大切である。一部にこだわり過ぎて「木を見て森を見ず」にならぬよう大きな視野を養えば、それがより深い内容理解につながる。

⑥すべてがわからなくても良しとする

センター試験では、難しい単語が使われていても別の箇所での説明が異なる表現で述べられる場合が多い。わからない単語一つにこだわることなく、他の部分の文章から類推しようとする姿勢も大切である。

Ⅱ 2009年度リスニング試験の分析と対応

1. 全体的な傾向

読まれる総語数は、昨年度のリスニング問題とほぼ同じ。読み上げ速度にも変化がなく、ナチュラルな感じの英語である。内容はいずれも生徒の日常生活や学校生活の中で起きうる身近な話題がテーマになっている。出題形式、解答数、配点はいずれも昨年度と同じであるが、聞いた語をそのまま答えるのではなく、英語を聞いて一考を必要とする設問が増え難化し、平均

点も約24点と過去最低となった。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル（12点：解答数6）

- 対話を聞き、イラスト、数字、語句を選択する
- 各対話の総語数：30語前後

イラストや図、数字を見ながら放送を聞く。最初の台詞で状況をだまかに把握し、求められる情報を的確に探し出す。対話に出てくる語（句）や数字が全て答えになるとは限らず、計算する必

要がある設問も複数ある (5:00 + 2 hours - 15 minutes [問1] や $(\$5 - \$1) \times 11 + 0$ [問6])。キーワードは2番目～4番目のせりふに出てくるが、logo [問2] といった短い音や、big hands [問5] など簡単だが一つの意味を知っているだけでは対応できない語にも注意を払いたい。

<第2問>対話応答補充 (14点：解答数7)

- 対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する
- 各対話の語数：20語弱～30語強

問8

Man : Is everybody here now?

Woman : We're still missing Margaret.

Man : Oh, now I remember. She said she can't make it.

選択肢：

- ① I see. I hope she'll be here soon.
- ② I see. I remember her, too.
- ③ OK. She must have forgotten.
- ④ OK. We should go ahead then. (正解)

相手の質問した(述べた)ことへの自然な反応を考える。普通の会話はいつも相手への質問で終わる訳ではないように、相手の応答の前の台詞が必ずしも質問形になっていない場合もあることを覚えておく。また、make it、go ahead [問8] 等、日常生活でよく使用されるフレーズにも慣れておきたい。

<第3問A>対話内容Q&A (6点：解答数3)

- 対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する
- 各対話の総語数：40～50語前後

問16

Man : Could I take a day off tomorrow?

Woman : Well, we're pretty busy on Saturdays.

Man : I know, but I'd like to attend my friend's wedding. I can work an extra day next week instead.

Woman : I guess that'll work, but next time let me know earlier.

質問：What does the woman say?

選択肢：

- ① The man can take Saturday off this week.
- ② The man cannot go to his friend's wedding.

③ The man should not work an additional day next week.

④ The man should tell her about his absence next week.

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。事前に選択肢を読み、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。ただし最初に出てきた情報に変更が生じたり、[問16]のように解答が最初のせりふに含まれている場合もあるので、順を追って最後まで聞き通して確認する慎重さが欲しい。

<第3問B>対話ビジュアル (6点：解答数3)

- 対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める
- 対話の総語数：約150語

聞き得た情報を順に図表に当てはめてゆく。選択肢そのままの固有名詞が読まれるので、年代ごとに名前を順に確定していく。情報は時間の推移順に出てくるとは限らないし、最初に出てきた情報が状況により変化する場合もあるので注意を要する。

<第4問A>

Short Passage 内容Q&A (6点：解答数3)

- Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する
- 各台詞の総語数：100語前後

問21

Hello, Takashi? This is Rose. I'm in Kyoto now. I enjoyed staying with you and your family last week. Sorry to bother you, but I've got a problem. I can't find my gloves. Have you seen them? Maybe I left them on the table in the bedroom, but I'm not sure. They're green and match my coat. If you have them, can you please call me here? The number is ... oh, I hardly stay in my hotel room, so I'll contact you again tomorrow. Thanks. Talk to you later.

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねてゆき、求められる情報の所在を明らかにする。、but、so等、論理の展開に重要な鍵となる接続語に注意する。選択肢では答えとなる語が別の表現で表わされ

る (gloves のことを something she can't find) ことも多い。

<第4問B> 説明文内容 Q&A (6点: 解答数3)

- 説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する
- 説明文の語数: 約190語

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況想定ができるかがポイント。あとは話の流れに沿って順に問題に当たってゆく。要求された情報を正確に取り出す力が要求されるが、ここでも選択肢では答えとなる語が別の表現で表わされている (to stay in touch and communicate about important issues を to continue to exchange ideas [問23]、objective を goal、world leaders を influential people [問25] 等)。メモを取りながら、質問されるポイントの個所を絞って聞くことが大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約40秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えに目星をつけておき、2回目は確認の作業に当てたい。

3. 対応のポイント

① 聞く前に状況・場面を想像する

事前に問題指示文、選択肢、イラスト等に目を通し内容を推測しておく。聞く前に精神的なプレッシャーをできるだけ少なくすることも正しい聞き取りへの第一歩である。

② 会話特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば自然に聞くことができるが、We're running late! Hold on. [問10] のような会話特有の表現や、So, with a cat and a dog you'd pay double? [問14] のような平叙文が話し方によっては相手への質問となることにも慣れておきたい。

③ 対話の流れや方向性をつかむ

最後の発言に対する相手の応答を考える場合(第2問)、答えとなる情報はそのまま与えられている訳ではない。それまでの話の流れを理解し、これからどのような展開になるのかを推測する能力が求められる。その際、一般に予想される展開とは違うものになる場合もあるので、思い込みは禁物である。また、その他の問題でも、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最

後まで同じとは限らない。最後まで慎重に状況を確認したい。

④ 言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は同様に要求される。流れる英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らず、ある表現を別の形で言い換えてある場合も多くある。正答のカギとなる情報をきちんと整理する能力も求められる。

⑤ 全部完璧に聞き取れなくてもよしとする

筆記試験で英文を一字一句完璧に理解する必要がないのはリスニングにおいても当てはまる。聞き取れなかった箇所を悩み込んでしまうと次を聞き逃すことになる。たとえ理解できなかった部分があってもそのまま流し、「残りからさかのぼって推測すればいい」と思うくらいの余裕が欲しい。

4. 日頃の学習で大切なこと

① 英語の音を聞くことを習慣にする

「継続は力なり」とよく言われるように1日5分間でも英語を聞き続けることが大切である。センター試験の英語はナチュラルスピードよりも若干遅く話され、独特のリーズンもあまりない標準的なものである。様々なメディアを使って英語の音やリズムを継続的に耳に入れておくことを習慣としておき、英語を聞く抵抗感をできるだけ少なくしたい。

② 聞いた音を真似して声に出す

リスニング力をつけるには、聞いた音を頭の中で論理的に組み立て直す作業が必要である。そのためには、耳に入ってきた音を実際に口にして練習をする。最初はただの口真似にしかすぎなくとも、慣れるにしたがって徐々に内容が頭の中に入ってゆくのを実感できるであろう。

③ 語彙を増やし、自分で表現する練習をする

提供される情報の内容を理解するためには基本的な語彙力が必要である。知らない単語は聞き取ることができないし、あやふやな理解では誤った情報を受け取ってしまう可能性がある。また、内容を整理して別の表現で言い換える練習も積んでおきたい。

CROWN PLUS

English Series

中高一貫教育にも対応した中高生向け英語テキスト

CROWN PLUS **Level 3** 主対象 高1



大学入試を見据えた初学年向けテキスト

高校英語で求められる論理的読解力の養成を目的としています。

文法=高1~高3相当 英単語=3,000語レベル

B5判/2色刷・224頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 650円/リスニングCD1,500円

[指導書] 3,780円 <指導用CDおよびCD-ROM付>

CROWN PLUS **Level 4** 主対象 高2・高3



Level 3 の上位に位置付けられるテキスト

大学入試で求められる英語力の完成を目的としています。

文法=高3以上 英単語=4,500語レベル

B5判/2色刷・184頁 1,000円

[付属教材] WORKBOOK 550円/リスニングCD1,500円

[指導書] 3,780円 <指導用CDおよびCD-ROM付>

Level 1

主対象 中1・中2 1,000円

発展的言語材料、多様な読解教材を収録した検定教科書補完テキスト。

Level 2

主対象 中3 1,000円

高校英語への橋渡しのための表現と読解のテキスト

*表示価格は、学校納入価格(税込)。

三省堂高校英語教育 2009年 夏号

- 発行 ————— 2009年6月20日 定価100円(本体95円)
- 編集・発行人 ——— 八幡統厚
- 発行所 ————— 株式会社三省堂 ●ホームページ <http://tb.sanseido.co.jp/english/>
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 (03)3230-9421 (編集) 振替 00160-5-54300
- デザイン ————— キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話 (0426)45-6111 (代)

学習機能を充実させた最強のツール 高校生用英語辞典 勢ぞろい!

基礎からやり直す、英語を楽しむ。学習英和のエース、新登場!



エースクラウン英和辞典

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

投野由紀夫 [編]

2,835円 1,888頁 B6変型判 2色刷

巻頭カラー
96ページ!

中学の復習ができる
「学習ページ」

コーパスを駆使!

最重要語を
徹底解説する
「フォーカスページ」

和英総項目
2万3千!

類書中最大の
「和英小辞典」付き



語法・受験に強い!
現代英語に強い!

WISDOM

しかも、進化するウェブ辞書が無料で使える!

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブの音声付き。また、英和・和英ともに、教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を装備(一般公開中)。詳しくは、<http://www.dual-d.net/>へ。

ウィズダム英和辞典 第2版

井上永幸・赤野一郎 [編]

[並装] 3,465円 [革装] 5,250円

ウィズダム和英辞典

小西友七 [編修主幹]

[並装] 3,465円 [革装] 5,460円



受験にコミュニケーションにパーフェクトな最新版

基礎からマスター [読む・聞く・話す]



入試対応の
強化をして
全面改訂!

グランドセンチュリー
英和辞典 第2版 <CD付き>
3,129円



コミュニケーション
に役立つ会話例
を大幅に増強!

グランドセンチュリー
和英辞典 第2版 <CD付き>
3,129円



単語力アップ
のための工夫
がいっぱい

ビーコン英和辞典
第2版 2,835円



小型版

持ち運びに便利な
ハンディサイズ
A6変型判 2,310円

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411<編集>・9412<営業>
<http://www.sanseido.co.jp/> *表示価格は税込定価